

## 内外交差点

## 日常移動と観光二次交通の両輪 北海道で考えた移動資源の最大化

高原 幸一郎氏 (NearMe代表) 第11/12回

われわれはこれまで、自治体や交通事業者、企業の皆さまと連携し、独自のAIやアプリ、サービスサイト、LINEといった予約導線を活用して、限られた移動資源を効率的に生かす取り組みを進めてきました。単に車両やドライバーを増やすのではなく、既存の供給力を最大化することが創業以来のテーマです。この視点で、「地域の足」「観光の足」を支える仕組みづくりに取り組んでいます。

なかでも北海道は、重要な実装フィールドの一つです。同地は少子高齢化や公共交通機関の縮小、タクシー乗務員不足といった背景から「交通空白」が拡大しており、通院や買い物、通勤通学などの日常移動から観光地の二次交通まで、地域の移動基盤が揺らいでいます。生活交通と観光交通の双方をどう支えていくかは、地域にとって大きな課題です。

まず、日常移動の分野では、2023年に帯広市で取り組みを開始しました。当社のAIとLINEを活用した配車サービスを運用し、TKタクシー（小林義幸社長、北海道帯広市）が最初の事業者としてサービス提供を担いました。住民に身近なLINEを入口とすることで、従来の電話予約中心の配車を、より使いやすい形に転換しています。さらに24年度には、「部活コミタク」「夜のコミタク」といった生活シーンに応じた実証を実施。利用用途を具体化することで、地域の方々がサービスをイメージしやすくし、シェア乗りを日常生活の延長として自然に取り入れてもらうことを意図しました。

こうした実績を踏まえ、25年8月には国交省の「『交通空白』解消等リ・デザイン全面展開プロジェクト」に採択され、限定的な実証から日常の幅広い移動ニーズへの展開に移行しました。同時に、リアルタイムでの相乗りタクシーマッチングに当社のAIルーティング技術が活用されることになり、効率的な配車を実現しています。

同年12月にはサービス名称を「オビヒロコミ☆タク」に統一。予約割引やシェア成立による割引を組み込み、公式LINEから予約可能とするなど、実

際の利用状況に即した導線設計を進め、「使えるサービス」として日常に根づかせることを目指しました。

26年2月からは芽室町にも展開し、公共ライドシェア(RS)の開始に合わせて、こぼとハイヤー(北海道根室町)と連携したLINE配車を提供しています。タクシーと公共RSを同一の導線で呼べる仕組みにより、供給が難しい時間帯やエリアでも地域全体で移動需要を受け止める体制を構築。限られた供給を効率よく活かしながら、日常の足を無理なく支えるモデルを作っています。

一方、観光需要が集中するエリアでは、二次交通の整備にも力を入れています。21年には新千歳空港を起点とするオンデマンド型空港送迎サービス「エアポートシャトル」を北海道に初導入。札幌市内やニセコ・倶知安エリアを結び、独自AIによるルーティングと相乗りを活用して、効率的でスムーズな空港送迎を実現しました。大型荷物や子連れ旅行など、旅行の負担を軽減するドア・ツー・ドアの移動サービスとして、既存公共交通を補完しています。さらに26年1月からは、富良野市で新富良野プリンスホテル様と連携し、スキーシーズンに集中する需要に対応する実証を開始。空港—ホテル間の貸切送迎に加え、ホテル—スキー場間の定期便「北海道パウダースノーシャトル」を提供し、観光地での移動のあり方を検証しています。札幌市でも都市型スノーリゾートの交通課題に対応し、バス減便や迎車困難に対して、同一目的地への利用者のシェア乗りを活用する実証を進めています。

このように、北海道での取り組みは「地域の足」と「観光の足」を分けつつも、同じ思想で設計されているのが特徴です。シェア乗り、事前予約、身近なデジタル導線、貸切・定期便、公共RSとの組み合わせなど、複数の手法を柔軟に使い分け、限られた移動資源を最大限に生かすことを目指しています。地域特性に応じ形を変えながら、持続可能な移動環境を実装していくこと。それが私たちの基本姿勢です。北海道での実践を通じて得られた知見を各地域へ展開し、「誰もが当たり前移動できる社会」の実現に引き続き取り組んでまいります。

